「支えるを「支える」税金」

静岡市立南中学校３年　齋藤　逞

「税金は、払うものだ」と僕は、なんとなく思いながら生きてきた。でも、なぜ払わなければならないのだろう？「法律で決まっていて、国民の義務だから」と言われれば、それまでかもしれない。けれど、そんな考えを変える出来事が起こった。その出来事とは、「祖父の介護」のことであった。

小さいころ、僕はよく祖父母の家へ遊びに行っていた。遊びに行くと、祖父は、いつもどこかへと連れ出してくれた。僕は、そんな何気ない時間がとても好きだった。しかし、ある日を境に、祖父の物忘れが激しくなっていった。今何をしようとしていたのかも忘れてしまうことが増えた。心配になった祖母が祖父を病院に連れていくと、医師から認知症と診断された。以前とは違い、急に大声で怒鳴ったり、思いがけない行動をしたりすることも増えていった。僕は、「今までの祖父はどこへ行ってしまったのだろう」と感じた。そんな祖父の介護を、主に祖母がしていた。祖父の様子が変わっていく中で、祖母も戸惑いながら介護を続けた。僕はその姿を見て家族だけで介護をすることは、とても大変なことだと実感した。一人で抱え込むのではなく、誰かの力を借りることも必要なのだと思った。そこで利用したのがデイサービスなどの介護サービスだった。祖父がデイサービスを利用することで、祖母もその間休むことができ、家族だけで抱えていた負担を減らすことができた。その後、僕は介護保険について調べた。すると、介護保険の財源には税金も使われていることを知った。それまでの僕は、税金とは「国民の義務だから、仕方なく払うもの」くらいにしか考えていなかった。しかし、祖父の介護を通して、税金が大切な人の生活を支えることにも使われてると知り、税金を身近なものとして考えるようになった。

祖父はその後亡くなった。今振り返ると、介護サービスなどの支えがあったことは、祖母や家族にとって大きな助けになっていたと思う。

僕は今、税金をただ「義務だから払うもの」だと思っていない。自分や大切な人、そして誰かの生活を支えるために、みんなで負担しているものだと思う。